

2014年3月10日 記者会見 発表内容

発表内容：役員異動について

日 時：2014年3月10日(月) 16時00分～16時30分

場 所：埼玉県政記者クラブ

発 表 者：埼玉りそな銀行 社長 上條 正仁
副社長 池田 一義

【冒頭挨拶】

(上條)

本日は急なお願いにもかかわらず、お忙しいところお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。埼玉りそな銀行社長の上條でございます。

本日は4月1日付で行います当社のトップ交代内定について発表させていただくため、お集まりいただいた次第です。4月1日開催予定の株主総会決議を前提として、本日開催しました臨時取締役会において2014年度の役員人事などのガバナンス体制を内定いたしました。まず、取締役会長渡辺拓治は退任し、これまでも兼務しておりました公益財団法人埼玉りそな産業経済振興財団理事長職に専念いたします。代表取締役社長の私は渡辺の後任として取締役会長、私の後任は現在代表取締役副社長をしております池田一義が代表取締役社長に就任いたします。詳細資料はお手元に配布させていただいておりますのでご参照ください。私は2009年6月に社長に就任しましたが、以来4年10か月の間、多くのお取引先の皆さま、県内経済界の方々、埼玉県上田知事、さいたま市清水市長はじめ市町村など行政の皆さま、メディアの皆さまなどをはじめ、地域の多くの方々にお引き立てを賜りましたことに対しまして、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

昨年4月にりそなホールディングス、りそな銀行、近畿大阪銀行などのグループ各社のトップ交代がすでに済んでおり、会長の渡辺、私としても就任後5年近くたち、社内的にその準備、人選を進めてまいりました。今回、次の世代にバトンを渡し、新経営陣には次の10年に向けて新しいパワーや知見でこれまで以上に地域経済や個人のお客さまのお役に立てる、一層存在感のある地域銀行への成長を担ってほしいと期待しています。

私も会長という立場で団結して力を尽くしてまいる所存です。今後ご指導ご鞭撻をいただきますようお願いいたします。

それでは、後任の池田より皆さまに一言ご挨拶をさせていただきます。

(池田)

4月1日付で埼玉りそな銀行の社長に就任することとなりました池田でございます。

経営環境が大きく変化しつつあるなかの交替ということもあり、大変身の引き締まる思

いであります。まずは、歴代の経営トップが築いてこられた埼玉りそなの経営の考え方、大きな軸を、しっかりと引き継いで経営にあたっていきたいと考えています。特にリーマンショック後の難しい環境のなか経営の舵取りをされた渡辺会長、上條社長には敬意を表したいと思います。

改めて初心にかえり、地域金融機関としての存在意義を発揮し、地元埼玉の発展とともに成長する銀行となるよう努力してまいりたいと思います。昨年で創業10年を迎えることができ、懸案であった公的資金もピーク時には3兆1000億に上る金額がございましたが、現在3560億ということで10分の1に減少しました。これも埼玉県民の皆さま、事業者の皆さまのおかげであり、改めて感謝申し上げたいと思います。次の10年、そしてポスト公的資金を展望することも必要であると思っています。多様化し変化するお客さまのニーズに対して、また少子高齢化などの社会構造の変化に対応して、これまで以上にお客さまの立場に立った、創造性に富んだ高品質な商品・サービスをご提供していきたいと考えています。

りそなグループにあって、地域に軸足を置きながら、「グループの力」、例えば、信託、600の店舗ネットワーク、そして情報を最大限に活用したソリューションやサービスのご提供を行うと同時に、埼玉県をはじめとする指定金融機関の業務を通じて、県ならびに市町村のお役に立つ施策の展開を行うなど、地域に貢献する、質の高い地域金融機関の新たなモデルを目指してまいります。

この一年間、副社長として県内のお取引先を訪問させていただきましたが、埼玉県の良さ、潜在力、成長性を実感する毎日でした。これからは、埼玉りそな銀行の先頭に立ち、引き続き「埼玉県の皆さまに信頼され、地元埼玉とともに発展する銀行」を目指し、努力していく覚悟でございます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

【質疑応答】

Q. 社長就任の内示を受けたのはいつか

A. (池田)

3月の上旬にりそなホールディングス東社長、埼玉りそな銀行上條社長から内示を受けました。

Q. 内示を受けた時の感想は

A. (池田)

身の引き締まる思いとはこういうものかと感じました。今まで副社長としてやってきましたが、倍以上の責任の重さがあるのだろうと感じました。

Q. 会長・社長の役割分担は

A. (池田)

会長については取締役会議長になっていただくほか、忌憚のない意見、経営についてのアドバイスをいただきたいと思っています。同時に数多くのお客さまとのリレーションについても参考にさせていただきたいと思っており、お客さまの対応もお願いしたいと思っています。

Q. 全国のネットワークを持つグループにおいて埼玉に特化した金融機関としてどういった分野に重点的に取り組んでいきたいか

A. (池田)

グループの機能の活用を大きな武器として差別化を図っていきたいと思っています。当社は埼玉の地域金融機関でありながら、都銀としての機能を有しています。なかでも、もっとも大きなファクターは信託部門です。年金業務や、遺言信託などの機能信託といったインフラを使えるということは大きなメリットであり、これによりお客さまに提供できる商品、ソリューションも変わってきます。そこを差別化のポイントにしていきたいと考えています。

また、グループには600の拠点というネットワークがあり、そこにいるお客さまと埼玉のお客さまとのビジネスマッチングなど、さまざまな情報提供も行うことができます。こうした点も差別化のポイントにしていきたいと考えています。

Q. 大宮や県東部など他県の金融機関の進出があるが、現在の競合環境をどうみているか

A. (池田)

非常に厳しいとみています。他県からの進出、お客さまへの攻勢も激しく、特に(金利等の)価格競争が激しいと実感しています。

(上條)

今後はダイレクトバンキングの強化という面と店舗ネットワークを使ったフェイストゥフェイスの親身な対応という面の二つがうまく融合しなければクオリティの高い営業活動はできない状況になっていくと考えています。そのなかで埼玉りそな銀行は都市銀行の機能と地域銀行としてのリレーション、店舗ネットワークを持っています。そこを最大限発展させることで埼玉県内におけるファンを増やし、確固たる顧客基盤を守り、お客さまから評価される銀行を作ることができると考えています。

Q. 高品質な商品・サービスの提供とは具体的には

A. (池田)

信託の分野では年金があります。特に今後解散する総合基金などに対し、ソリューション

ンを提供できると考えています。DC・DBなどの商品により、提案のすそ野が広がると
思っています。また、高齢社会を迎えるに当たり、事業承継のタイミングにさしかかる
企業も多く、そうした企業に対する事業承継信託など、うまく次世代に事業を引き継げ
るようなサービス・ソリューションの提供ができると考えています。

(上條)

埼玉りそな銀行の個人のお客さま向けのビジネスでは、FPの育成などの人材育成に力
を入れています。私の就任当時48人だったFPも80名を超えるまでになっていますが、
池田社長には100名体制となるようお願いしたいと思っています。こうした部分は、ま
だまだ十分とは言えない面もあるので、さらなる人材育成により、今後、一層高品質な
サービスを提供できる余地があると考えています。

Q. 年初から金融庁が地銀再編に言及しているが、どう考えているか

A. (池田)

一般論としては一つの選択肢といえると思いますが、われわれはまず埼玉りそな銀行
を、りそなグループにおいて埼玉を担う地域金融機関として、競争に勝てる銀行にして
いくことが大事だと考えております。したがって、再編に頼るという考えはありません。

Q. 公的資金返済の目途も立っているがそれでも再編は考えないのか

A. (池田)

われわれとしてはまず資本の蓄積を行わなければならないと考えています。また、投資
も行わなければなりません。IT投資や高機能商品の開発にも投資が必要であり、そこ
に振り向ける部分もあります。すぐに再編というような気運になるということはない
と思っています。

(上條)

りそなグループの強みは営業基盤が大都市圏にあることです。当面はその良さを伸ば
していくことが最も重要になると考えています。

Q. グループ全体でトップラインが減少している中、解決策の糸口がないように見えるが

A. (池田)

規模の利益をとるか質をとるかという問題もありますが、現状では異次元の緩和のな
かで利ザヤの縮小や金利の低下により、そういうこと(トップラインの減少)もあると
思います。しかしながら、この状況が永久的に続くわけではありませので、経済の潮
目の変化を読みながら、きちんとトップラインを上げられるような、筋肉質の銀行を作
り上げていくことが重要だと考えています。

Q. 池田副社長を後任に選んだ理由、期待することは

A. (上條)

これからの銀行は、システム化と営業店の両面を、うまく融合してお客さまに最大限の価値を提供していくことが重要になります。そのためには幅広い経験値、知見が必要となります。池田副社長については、りそなグループにおいて事務改革などの中で中心的な役割を担ってきており、営業店運営に造詣が深く、また経営の中枢にかかわる企画部門も経験しています。きわめてバランスよく銀行員としての経験を積んできており、今後これを社長として発揮してもらいたいと考えてお願いしました。

Q. 上條社長にとって現在までの就任期間で一番しんどかったことは、また一番誇れることは

A. (上條)

一番しんどかったのは、言うまでもありませんが、東日本大震災です。現在も被災地で苦しんでいる方が数多くおられます。われわれは幸いにも営業上の被害は非常に少なかったわけですが、一方で、計画停電などがあるなか、いかにお金というライフラインをお客さまの利便性が損なわれないように維持していくかということに対しては大変心を砕きました。当時はパートナー社員も含め最大限の努力をすることによりお客さまの利便性を維持できたと考えています。また、双葉町の皆さんが騎西町に避難してこられた際は、騎西町にある唯一の金融機関として、東邦銀行さんなどと協力をしながら、誠心誠意尽くしてきたと考えています。東日本大震災はしんどかったけれどもやりがいのあった局面であり、そこを乗り越えられたことはよかったと思っています。

また、約5年の就任期間はほとんどがリーマンショック後であり、金利低下、緩和の局面であり、かつ個人ビジネスの上でも投資信託や保険商品の販売不振が続いていた時期でもありました。この間をうまく利用し、地力をつけるために人材育成には特に力を入れてきたつもりです。この4年間、法人向けには経営者の経営課題解決型の営業スタイルの徹底を、個人分野では知識の裏付けのあるコンサルティング営業をきちっとやっていたこうと言い続けてきました。この部分についてはある程度の土台が出来上がったと考えております。経済もようやく成長局面に向け、潮目が変わりつつあるので、池田新社長が舵を取っていくなかでそうした土台をうまく活かし、力を発揮していければいいと思っています。

Q. りそなグループにおいてトップ育成のプログラムはあるのか、またそれはどんなものか

A. (池田)

サクセッションプランという、部長層、役員層、役員のシニア層など、それぞれに応じた育成プログラムがあります。研修、プロセス、社外取締役により構成される指名委員

会のメンバーの客観的な視点も踏まえ協議し、トップ候補を絞り込んで決めていくものです。こうしたプログラムは他行ではまだ少ないのではないのでしょうか。この仕組みも今後変化していくとは思いますが、りそなショック後、細谷会長が健在の時期、次の経営者をどう育てるかを当時の指名委員会と議論し、今のような仕組みを作りました。

(上條)

グループの役員が短期的、中長期的という視点等で毎年数名の後継者推薦を行います。これらの人材に常にスクリーニングをかけることで透明度の高い形で運営できていると思います。

Q. 指名委員会は何名で構成されているか、そのうち社外取締役は何名いるか

A. (池田)

3名で構成され、全委員が社外取締役です。

Q. このタイミングで社長交代を行うのはなぜか

A. (上條)

埼玉りそな銀行の社長は利根が3年、川田が3年、私は4年10か月になります。公的資金を背負って10年やってきて、様々なステージがありましたが、現状は公的資金も3560億というレベルまで減少し、飛躍のステージへ向かっていく段階だと判断しました。また、昨年グループではりそなホールディングスを含め、2行のトップを交代しております。そうしたなかでわれわれも準備をしてきたということです。

Q. グループ他社から1年遅れたのはなぜか

A. (上條)

特に理由はありません。

Q. 災害対策室長を歴任したそうだが、学んだこと、経験になったことはあるか

A. (池田)

当時はオペレーション改革部の担当として、りそなホールディングス、りそな銀行の兼務でオペレーションやITを統括しておりました。オペレーション改革のなかには店舗や管財部門もすべて含まれていたため、たとえば仙台支店の復旧、社員の安全確保、食料や物資の供給、さらには東電の問題など解決すべき様々な複合的な事象が発生しました。当時の経営陣はこうした問題は船頭が多いと混乱するということで、指揮はすべて私に任せてもらい、口出しはしないと言ってくれました。そのおかげで即断即決し、スピーディな対応ができました。これは今の私にとっての教訓となっており、当時の経営陣には感謝しています。

また、そのおかげもあり、業務の継続性についても関東圏で大規模な災害を受けて機能不全となっても関西圏できちんとオペレーションができる仕組みを、短期間に構築することができました。

Q. 趣味は

A. (池田)

ドライブで遠出をすることです。県内だと秩父など。また、それほど造詣が深いわけではないですが絵画鑑賞。

Q. 家族構成は

A. (池田)

家内、長男、長女がおります。

以上